



篇文学全集  
33

穂 整 一



責任編集 白井吉見

筑摩書房

---

日本短篇文学全集 第33卷

昭和43年 4 月25日第一刷発行

横 光 利 一

著 者 伊 藤 整

稲 垣 足 穂

発行者 竹 之 内 静 雄

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2 の 8

電話 東京(291)7651

振替 東京4123

製版・明和印刷

印刷・多田印刷

製本・鈴木製本

定価 360円

---

## 目次

横光利一

蠅……………三

御身……………九

静かなる羅列……………二

機械……………二

天城……………七

伊藤 整

馬喰の果て……………三

生物祭……………二三

|       |    |
|-------|----|
| 生きる怖れ | 二四 |
| 山羊と私  | 二六 |
| 文学祭   | 二七 |
| ある女の死 | 二八 |

# 稲垣足穂

|          |     |
|----------|-----|
| 天体嗜好症    | 二〇三 |
| 白鳩の記     | 二二五 |
| 水晶物語     | 二三六 |
| 青い箱と紅い骸骨 | 二五〇 |
| 或る小路の話   | 二六五 |
| 鑑賞（丸谷才一） | 二七五 |

橫  
光  
利  
一

## 横光利一（一八六—一九七）

明治三十一年三月十七日福島県北会津郡東山温泉で生まれた。大正三年早大英文科に入学、一年余で退学した。後、政経科に再入学したが、結局、中退した。藤森淳三等と同人誌「街」を創刊した。富沢麟太郎、中山義秀等と「塔」を創刊し、大正十年「御身」を書き「日輪」とりかかる。その後「蠅」（大正十二年）「碑文」（大正十二年）などを経て「日輪」を発表した。大正十三年十月川端康成、片岡鉄兵、中河与一などと「文芸時代」を創刊し、新感覺派文学運動を展開した。以後「静かなる羅列」（大正十四年）「ナポレオンと田虫」（大正十五年）等、多くの作品を発表し、初期の作風は「上海」に結実された。昭和五年新興芸術派クラブに参加、「機械」「憂園」（共に昭和五年）「時間」（昭和六年）「雅歌」（昭和七年）等の作品を書いた。昭和十年「純粹小説論」を発表し、「家族會議」にその具体化を示した。昭和十一年欧州旅行に出发し、翌十二年より、最大の長篇「旅愁」を書きはじめた。以後「春園」（昭和十二年）「寒くも熱せず」（昭和十五年）「鶏園」（昭和十六年）等を発表した。戦後、「微笑」「悪人の車」（共に昭和二十二年）を発表、これを最後として、昭和二十二年十二月三十日胃潰瘍で死去した。

## 蠅

## 一

真夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の網にひっかかる、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れていた。と、豆のようにぼたりと落つた。そうして、馬糞の重みに斜めに突き立っている藁の端から、裸体にされた馬の背中まで這い上つた。

## 二

馬は一条の枯草を奥歯にひっかけてまま、猫背の老いた馭者の姿を捜している。

馭者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、将棋を三番さ

して負け通した。

「なに。文句を云うな。もう一番じゃ。」

すると、廂をもれた日の光は、彼の腰から、円い荷物のような猫背の上へ乗りかかつて来た。

## 三

宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が駆けつけた。彼女は朝早く、街に務めている息子から危篤の電報を受けとつた。それから露に湿つた三里の山路を駆け続けた。

「馬車はまだかのう？」

彼女は馭者部屋を覗いて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかのう？」

歪んだ畳の上には湯吞が一つ転っていて、中から酒色の番茶がひとり静に流れていた。農婦はうろろと場庭を廻ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかのう？」



「先刻出ましたぞ。」

答えたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早く来ると良かったのじゃが、もう出ぬじやろか?」

農婦は性急な泣き声でそう云ううちに、早や泣き出した。が、涙も拭かず、往還の中央に突き立っていてから、街の方へすたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馭者は将棋盤を見詰めたまま農婦に云った。農婦は歩みを停めると、くるりと向返ってその淡い眉毛を吊り上げた。

「出るかの。直ぐ出るかの。悴<sup>せがれ</sup>が死にかけておるのじゃが、間に合せておくれかの?」

「桂馬と来たな。」

「まアまア嬉しや。街までどれ程かかるじやろ。いつ出しておくれるのう。」

「二番が出るわい。」と馭者はぽんと歩を打った。

「出ますかな、街まで三時間もかかりますかいな。」

三時間はたつぷりかかりますやろ。悴<sup>せがれ</sup>が死にかけていますのじゃが、間に合せておくれかのう?」

#### 四

野末の陽炎<sup>かげろう</sup>の中から、種蓮華<sup>たねれんげ</sup>を叩く音が聞えて来る。若者と娘は宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

「持とう。」

「なアに。」

「重たかろうが。」

若者は黙っていかにも軽そうな容子<sup>ようす</sup>を見せた。が、額から流れる汗は塩辛かった。

「馬車はもう出たかしら。」娘は呟<sup>つぶや</sup>いた。

若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、  
「ちよっと暑うなったな、まだじやろう。」

「誰ぞもう追いかけて来ているね。」

若者は黙っていた。

「お母<sup>かあ</sup>が泣いてるわ。きっと。」

「馬車屋はもう直ぐそこじゃ。」

二人は黙ってしまった。牛の鳴き声がした。

「知れたらどうしよう。」と娘は云うとちよつと泣きそうな顔をした。

種蓮華を叩く音だけが、幽<sup>かすか</sup>に足音のように迫って来る。

娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。

「私が持とう。もう肩が直ったえ。」

若者はやはり黙ってどしどし歩き続けた。が、突然、

「知れたらまた逃げるだけじゃ。」と呟いた。

## 五

宿場の場庭へ、母親に手を曳かれた男の子が指を銜<sup>くは</sup>えて入って来た。

「お母ア、馬馬。」

「ああ、馬馬。」男の子は母親から手を振り切ると、厩<sup>うまや</sup>の方へ馳<sup>う</sup>けて来た。そうして二間ほど離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりゃッ、こりゃッ」と叫んで片足で地を打った。

馬は首をもたげて耳を立てた。男の子は馬の真似をして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただやたらに馬の前で顔を顰<sup>しか</sup>めると、再び「こりゃッ、こりゃッ」と叫んで地を打った。

馬は槽<sup>おけ</sup>の手蔓<sup>てづる</sup>に口をひっかけながら、またその中へ顔を隠して馬草を食った。

「お母ア、馬馬。」

「ああ、馬馬。」

## 六

「あつと、待てよ。これは悴せがれの下駄を買うのを忘れたぞ。あいつは西瓜すいかが好きじゃ。西瓜を買うと、俺もあいつも好きじゃで両得じゃ。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。三十三年貧困と戦い続けた效かいあつて、昨夜漸ようやく春蚕はるごの仲買で八百円を手に入れた。今彼の胸は未来の画策のために詰くっている。けれども、昨夜銭湯へ行つたとき、八百円の札束を鞆に入れて洗い場まで持つて入つて、笑われた記憶については忘れていた。

農婦は場庭じやうぢの床几しょうぎから立ち上ると、彼の傍へよつて来た。

「馬車はいつ出るのでござんしょうな。悴が死にかかつていますので、早く行かんと死に目に逢えまいと思ひましてな。」

「そりゃいかん。」

「もう出るのでござんしょうな。もう出るって、さつき云わしやつたがの。」

「さアて、何しておるやろな。」

若者と娘は場庭の中へ入つて来た。農婦はまた二人の傍へ近寄つた。

「馬車に乗りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者は訊きき返した。

「出ませんの？」と娘は云つた。

「もう二時間も待つてますのやが、出ませんぞな。」

街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつていますかな。九時になつていますかな、街へ着くと正午ひるになりますやろか。」

「そりゃ正午や。」と田舎紳士は横から云つた。農婦はくると彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」

と云う中にまた泣き出した。が、直ぐ饅頭屋の店

頭へ馳けて行つた。

「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじやるか？」

猫背の馭者は将棋盤を枕にして仰向きになつたまゝ、簀の子を洗っている饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸さらんかいの？」

## 七

馬車はいつになつたら出るのであらう。宿場に集つた人々の汗は乾いた。併し、馬車はいつになつたら出るのであらう。これは誰も知らない。だが、もし知り得ることのできるものがあつたとすれば、それは饅頭屋の竈かまどの中で、漸く脹ふくれ始めた饅頭であつた。なぜかと云えば、この宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつけると云うことが、それほど潔癖から長い月日

の間独身で暮らさねばならなかつたという、その日その日の、最高の慰めとなつていたのであつたから。

## 八

宿場の時計が十時を打つた。饅頭屋の竈は湯氣を立てて鳴り出した。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切つた。

馬は猫背の横で、水を十分飲み溜めた。

## 九

馬は馬車の車体に結ばれた。農婦は真先に車体の中へ乗り込むと、街の方を見続けた。

「乗つとくれやア。」と猫背は云つた。

五人の乗客は、傾く踏み段に氣をつけて農婦の傍へ乗り始めた。

猫背の馭者は、饅頭屋の簀すの子この上で、綿のように脹らんでいる饅頭を腹掛けの中へ押し込むと、馭

者台の上にその背を曲げた。喇叭ラッパが鳴った。鞭が鳴った。

眼の大きなかの一匹の蠅は馬の腰の余肉あまじしの匂いの中から飛び立った。そうして車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、漸く蜘蛛の網からその生命をとり戻した身体を休めて、馬車と一緒に揺れて行った。

馬車は炎天の下を走り通した。そうして並木をぬけ、長く続いた小豆畑あずきばたけの横を通り、亜麻畑と桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、漸く溜った馬の額の汗に映って逆さまに揺らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饒舌が、早くも人々を五年以来の知己ちきにした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握って、その生々とした眼で野の中を見続けた。

「お母ア、梨梨。」

「ああ、梨梨。」

馭者台では鞭が動き停った。農婦は田舎紳士の帯の鎖に眼をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

馭者台で喇叭が鳴らなくなった。そうして、腹掛けの饅頭を、今や尽く胃の腑こころの中へ落とし込んでしまった馭者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きい蠅が押し黙った数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光を受けて真赤に栄えた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下して、そうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたときしみ出す音を聞いてまだ続いた。併し、乗客の中で、その馭者の居眠りを知っていた者は、僅わずかにただ蠅一疋であるらしかった。蠅は車体の屋根の上から、馭者の垂れ下った半白の頭に飛び移り、

それから、濡れた馬の背中に留って汗を舐めた。

馬車は崖の頂上へさしかかった。馬は前方に現れた眼匿し中の路に従って柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考えることができなかった。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車体に引かれて突き立った。瞬間、蠅は飛び上った。と、車体と一緒に崖の下へ墜落して行く放埒な馬の腹が眼についた。そうして、人馬の悲鳴が高く発せられると、河原の上では、押し重った人と馬と板片との塊りが、沈黙したまま動かなかった。が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まったその羽根に力を籠めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいった。

(大正十二年五月)

## 御 身

### 一

末雄が本を見ていると母が尺を持って上って来た。「お前その着物をまだ着るかね。」

「まだ着られるでしょう。」

彼は自分の胸のあたりを見て、

「なぜ？」と訊き返すと、母はやはり彼の着物を眺めながら、

「赤子のお襦袢にしようかと思うて。」と答えた。

「赤子って誰の？」

「姉さんに赤子ができるのや。」母はなぜだか普通の顔をして云った。

彼は姉にそんなことがあるのかと思うと、なぜか顔が赧あからんだ。しかし、全く嬉しくなった。

「ほんとうか？」

「もうその着物いらんやろ。代りのを拵こしらえてあげて解ほどこうな。」

「ほんとうにできるのか。」

母は答えずそのまま下へ降りてしまった。彼はちよつと腹が立った。が、その腹立たしさの中から微笑がはみ出るように浮んで来た。いくら顔をひき締めてみても駄目だった。

彼と姉とは二人姉弟で、姉は六年前に人妻になっていた。それにまだ子供は一人もなかった。

## 二

晴れた日、彼は山を越して姉のおりかの家へ行った。赤子のことを訊くのが羞はづかしかったので黙って時々気附かれぬように姉の帯の下を見た。しかし、彼

の眼では分らなかった。ただ何となく姉は生々としていた。姉は間もなく裏の山へ行こうと云い出した。二人は山へ来ると蘚こけの上へ足を投げ出して坐った。真下に湖が見えた。錆色さびいろの帆が一点水平線の上にじつとしていた。深い下の谷間からは木を挽く音が聞えて来た。

「ボケを一本ひいて帰ろ、もう直き花が咲くえ。」

姉はそう云いながら立って雌松林の方へ登っていった。彼はひとり長々と仰向きに寝て空を見ていた。長い間姉と二人でこういう所へ来てこういう風に遊んだことはなかった。彼は姉がたいへん好きであつた。

「こいつ、堅いわア。」と姉の声が頭の上でした。

彼が振り返って姉の方を見ると、姉はちようど躑躅つじをひき抜こうとして両脇を下腹にあてがって後へ反り返ろうとしている所であつた。彼は姉の大切な腹の子供に気がついて跳ね起きた。

「よせ。」

彼は馳けていって姉を押しのと自分でその躑躅をひいてみた。根はなかなか堅かった。

「堅いやろ。二人かかるとええわ。」

そう姉は云ってまた躑躅に手をかけようとした。

「行こう。行こう。」

彼が姉の手を持ってもとの所へ戻ろうとすると、

姉は未練そうに後を見返りながら、

「もうじき綺麗な花が咲くえ。あれ餅躑躅え。葉が

ねばねばするわ。ああしんど。」と云った。

彼は姉の下腹を窺<sup>うかが</sup>った。躑躅をひくときの姉の様子を浮かべると、肱で子供が潰<sup>つぶ</sup>されていそうに思えてならなかった。しかし、それをどうして吟味してよいものか分らなかった。姉に訊いてみることも羞<sup>はづか</sup>しくてできないし、これは困ったことになったと彼は思った。

姉は足もとの処でまた一本小さな躑躅を見つける

と、

「末っちゃん、これなら引けるえ。」と云ってその方へ寄りかけた。

「うるさい。」と彼は叱った。

「たまに來たのに一本ぐらい引いて帰らにやもったいない。」

「もう帰るんだ。」

「もう帰るん？」姉は彼の顔を見ると、

「何アんじゃ。」と云って笑い出した。

彼は黙ってさきになつて歩いた。實際彼には姉の腹のことがひどく気になり出した。もうそれ以上遊ぶ気がしなくなった。

「お腹すかないか。」

と彼は不意に姉に訊いてみた。空<sup>す</sup>いていると答えれば、幾分か肱で腹の子供を押し潰<sup>つぶ</sup>したそれだけ空<sup>す</sup>いているのだとそんな他愛もない考えから訊いたのだが、姉は空<sup>す</sup>かないと答えた。しかし、無論その答



えだけでは承知ができなかった。

「俺はちよつと腹が痛いんだ。姉さん処の昼の肴さかなが悪かったんじゃないかね。姉さんは？」と彼は訊ねた。

姉は顔を顰しかめるようにして彼を見ながら、

「私うちどうもないえ、ひどう痛むの？」と訊き返した。

姉も痛むと云えばまた姉の腹部の子供に触さわりがで

きているにちがいないという考えから、彼はそういうかけひきで訊いたのだった。所が姉の腹は痛んでいなかった。少し安心ができかけるとまた親の腹部の感覚と子供の感覚とは全く別物だと気がついた。

親の腹が痛くなくとも子の身体は痛んでいるかも知らなかった。もう医者には姉の腹を見せるより仕方がないと彼は思った。しかし、見せるとすればまたどうしても一度は彼の心配の仕方を姉に話さなければならなかった。これが彼には羞しくて厄介だった。正式な結婚で姉は人妻になっているとは云え、とに

かくいずれ不行儀な結果から子供が産れて来たにちがいない以上、それをお互に感じ合う瞬間が彼にはいやであった。彼が黙っているので姉も黙っていた。「まだ痛い？」と姉は暫しばらくして訊いた。

「もういいんだ。」

「降りたら薬屋があるわ。小寺さんなら近いし、痛い？」

小寺さんとは近くの医者の名であった。

「もう癒なおったよ。」と彼は云うと、

「それでも診みてもうておく方がええやないの。」

と、今度は姉から彼に医者をすすめ出した。彼は聞かぬ振りをしてどしどし山を下った。

### 三

四月には彼は東京にいた。女の子が生れたと云う報知を姉の良人から受け取ったのは五月であった。

「しめた！」と彼は思った。そして、今迄誰にも云